七師団戦記

あゝ沖縄

<150>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

沖縄の女性

機敏に動く看護婦

水浸しの洞くつで

この洞（ほら）穴には、女性たち一看護婦、新城等清部隊三〇人を記録している。連日、県立第二高女生十五人がひとり残った。

みんな泥塊で真っ黒。手足、顔、衣服を洗う暇がない。包帯交換、看護、食事分配、その他雑用に、不眠不休でかけ回っている。

薄沢軍曹は、よく動く、かわいらしい女学生大城ノミさんと看護婦の大平さんを名指している。ふたりの生死を、手記のなかで記している。

大城ノミさんは、戦記第百七十三回の写真（糸満町国吉「旧高嶺村」自慢之家の磯間）にその名前が刻まれている。きっと、二十年六月二十日、この海のわきの洞穴内で、同級生といっしょに手りゅう弾で自決したのだろう。感激の涙をとめ、ここに、ことの報を伝える。

看護婦の大平さんはどうしたかーこの戦記は沖縄へも送っているので、大平さんのその後の消息がわかることを待ち、薄沢さんの思い出をつづる。

× ×

「二十年六月二十日から八日」、このとき、衛生兵たちとともに、新城部隊の負傷者を背負い、大いそぎで二号病室へ移している。

流れ込む新城野病の洞穴の下を流れている川があふれ川が洞穴へ流れ込み、二号病室の患者の寝台が水びたしになりはじめた。

あわただしい看護婦たちの叫びで駆け つけた軍曹は事態を知った。衛生兵たちが、それぞれ重傷患者を背負い、大いそぎで 二号病室へ移している。

× ×

「二十年六月二十日から八日」、このとき、衛生兵たちとともに、新城の切り岩まで、宮崎でも出 ファイトと力強の持ち主だ。軍曹は右とうき敬服した。その女性が看護婦の大平さんで、名前を忘れたのが残念であるとは 知った。衛生兵たちが、それぞ れ重傷患者を背負い、大いそぎ で

七師団戦記

あゝ沖縄

<151>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

むかしから沖縄の女は、じっとしているよりは、少しでもかせいで、子供に教育を仕込んでおこうとする心意気があるーという。

沖縄の人は学問好きだ。学者も出ているが、有名無名の郷土史家の多彩さがその証拠である。

二、三年前なくなった沖縄出身の詩人・山之口貘（やまのぐち・ばく）さんは

詩人バクさん

（なか・えいしょう）さんにいわせると「バクさん」である。

バクさんは那覇で生まれ、中学四年生で上京、くみ取り屋をはじめ、さまざまな生活苦とたたかいながら珠玉のような詩を書きつづけた人だが、名護さんもまた、若くして上京、作家久米正雄の書生を十年以上もやった人だ。学問好き、学会好きの一例だが、その名護さんと、タ張市の沖縄会員成のあと長髪、車のなかでバクさんを語り、喜多

や沖縄を語りあった。

× ×

昭和十七年六月ごろ、記者は山砲兵上等兵として、旭川北部

第八部隊長谷川隊に、西玉美一補充兵を迎えた。道立図書館司書の西玉さんは、薄い詩誌を一冊もって入隊していた。

新聞ラジオいっさい禁止の内務班で、記者は活字に飢えていた。詩誌のなかにバクさんの詩「ねずみ」があった。それは一（二十年以上たつので記憶ちがいがあるかもしれない。が、現しているに違ないので）

ねずみが一匹 住来のまんなかにもりあがっていた いろんな車輪がすべってきては アイロンみたいにねずみをのした ねずみはぺたんぺたんひらたくなった ひらたくなるにしたがって ねずみはねずみ一匹のねずみでも 一匹でもなくなって その死のかげすら消えうせた ある日住来にでてみると ひらたい石版のうえから写真をとろうものが一枚 日にたたかれてそりかえっていた〉

すでにノモンハン戦のみじめな敗戦状況は、ちまたにささやかれていた。

〈ああ、かわいそうに兵隊さん！〉そう絶叫するバクさんの暖かい心が身にしみ、いま直面している戦争の無残、激烈さを覚悟した。〈バクさんが鎮魂歌にうたいあげているネズミに見習おう〉そう感じた。

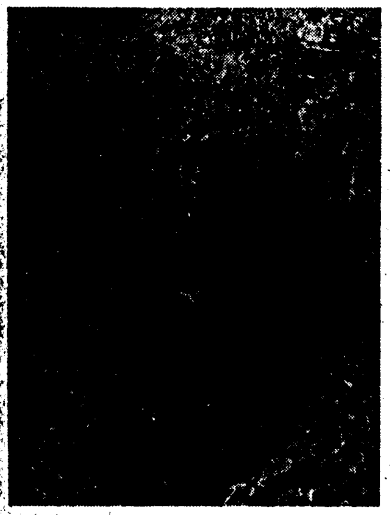
戦後、バクさんは、激戦地となった郷土沖縄をしのび、二千万円のぼる戦没者の鎮魂歌「麻文仁の丘」を作った。これを沖縄二世の歌手・仲宗根美智子が歌っているレコードを、今年二月下旬の深夜、那覇市の酒房「山原」（やんばる）で聞き、涙が流れてならなかった。

鎮魂歌『麻文仁の丘』

当時をしのんで作詩

〈バクさん、あれから二十年私はあなたの生れた沖縄へ、あなたのうたった「ねずみ」の真証を命ぜられてきているのです。きょうも、遠くの遺骨に祈りました。

石版のうえから写真をとろうとしてころげ落ち、尻もちをつ



沖縄県立第二高女生と看護婦たちは、この入り口から火炎放射をうけ、歌人はこうから脱出したが、ほとんどが重傷をうけた。

流れ、別れがたい音響を残していつまでもまちがいない。喜太郎ユーケックスにしかけた。泣きながら流行歌手のレコードに聞きいる中年男ーそんな自制心など、考えてもみなかった。

〈編集室から〉「七師団戦記」・ノモンハンの死闘」の手記出版を続け付け中です。

編集 山田三四七五部隊下真一郎真美の母へんさん（札幌市

戦没者の遺骨・仲宗根美智子が歌

ここは沖縄！

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

函館で療養するんだ

脳症起こす美青年

県立第二高女生（白梅部隊）が自決した洞穴の天井

七師団戦記

あゝ沖縄 <152>

「百発百中から衛生材料は、リパノールと包帯だけ。苦痛をじっと耐える者は、モルヒネ注射で眠らせた。食料もなくなった。独歩隊の富塚野戦から夜間、カマスいりの米や、箱いりのカンパンをかついで現れた。雑役婦たちが三カ所にすえつけた大ガマで早朝から夜おそくまでおにぎりをつくった。

ミソや塩をつけ、女子青年団員や女学生たちが愛情をこめた。

慶沢軍曹、同年兵の佐藤和正衛生一等兵（函館・山四七四部隊歩兵第中隊付）が、伝染病等はいった一一四号病室じゅうをさがした。

患者がたくさんならんで寝ている。そのいちばん奥に、チアノーゼ状（ちあん）（色）が眼しっかりとつぶり、口を結われヒン（顔）死の状態。

「おい、佐藤ッ、しっかりしろ！」

慶沢軍曹は、ならんでまだ生きている患者のうえに腰をおろして叫んだ

あゝ沖縄

七師団戦記

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

衛生兵の一部残す

看護婦らは後退

さようなら…

六月上旬のその日、雲一つない夕焼け空があざやかだった。新城部落の木のしげみから、突然、低い銃声がひびいた。ゆにさえた、聞きなれない銃声―たぶん、殺んだんそがれ空のせいだろうと藤沢軍曹は思った。

あたりを見回した。しーんと静まりかえっている。飛行機も飛んでこない。

これが、いままでのすべてに結末をつける最悪の日の幕あきだったのである。

何千人ともしれない、新城部落の大勢の村人が、われさきにと、うしおのようにドウクツから出てきた。村人たちがいたドウクツの入り口は、まるでアリのすをつついたようなさわぎ。男に女に荷物や赤ん坊をのせて走るのはなち、てんぴんでかついで走るのは男、親も子もちりぢりばらばら、大あわてに、あわてふため赤ん坊、泣き声をあげて逃げまどう。

彼らの頭上を敵観測機が超低空で飛ぶ。

「敵がきたッ！百財のところまで来ているッ！」

泣き声、叫び、どなり声―大勢の村人が真正面（ぐしちゃん）方面へ向かい、なだれをうって走る。走る―

その道は、藤沢軍曹らのいる新城野病のドウクツのうえを通っていた。みんなは、どんどん野病のうえを駆けぬける。軍曹は、あわてふためく村人の兵水にぼう然としていたが、やがて、付近のもと山三四七六部隊の陣地に、兵隊たちの姿が見えないのに気がついた。

「野戦病院はどこへ移されたのか―」

見ると、軍医が看護婦に「カンパンを一袋ずつ渡し

「どこの部隊でもいい、友軍のいるところへ早く行けッ！」

と絶叫している。眺めや上官殿に続いて負傷の兵隊たちは、村人のわれにくわわり、呼吹く見える八重岳方向に南下してゆく。

指揮をうけるようあやがでた。

第一号病棟の出口に張られる者、残る衛生兵らが、向きあって敬礼した。四人とも無言―

て、きょうまで兵隊の世話をつづけてきた。よくやった、婦人たち。おそらく、きょうかぎりの日はないだろう。さよ

（新城部落の中心部、村人がぞくぞくと山中へ消えていった。女学生たちもしばらくのあいだ、家屋のなかに）

へみじかい別れではあったが、藤沢軍曹は、胸のなかで絶叫した。みんなも同じ思い―それは声のない絶叫で閉じられたが、看護婦のなかから、静かな声がひびいた。

「さようなら―」

胸いっぱいの思いをこめながらも、その声はすがしいような澄化しきった声だった。

「さようなら」

衛生兵のだれかがそたえた。

「いわんとすることは、よくわかっている―」

おたがいに、ゆがおをうかべたまま、視線をじっと向けあっていた。

防衛兵、看護婦人につづいて、ぞろりかえりかえり、看護婦、男子軍属、女子青年団員らの姿がドウクツから外へ、そしてうすぐらのなかにとけこんでいった。

歩こうとするものもおそろしいようなとき、はじまったのは、それからだった。

「七師団戦記」・ノモンハン・山岳三四七六部隊・真一郎・山の姿へルぎん（沖縄市）

戦記から

（青葉崎、県立第二高女生、女子青年団員、防衛召集兵、帰国人らは、宮城野病に後退、その一千人以上の負傷者の治療に、給食に、たがいにはげましあった）

七師団戦記

あゝ沖縄

<151>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

重傷者に毒

涙をのんで飲ます

命令には静かに従う

青鼻汁や女学生、朝鮮人、沖縄の召集兵が出ていったあとのドウクツに、無気味な沈黙がおとずれた。巨大な静けさであるひろびろとした、遠い、深い静寂である。敏感な感覚でなくとも、そこはかとなく死のにおいがただよってくるのを感じないわけにはいかなかった。

カラ、カラ…カラ、カラ…

なにかでブリキかトタンの盆類をこする鋭い金属的な音。かきまわされる低い陰気な水の音—白い粉末は、バケツの水にとかされた。

「オーイ…みんな、聞いてくれ…」

その声は軍人らしから必、涙ぐんでゴシゴシよりぬけた声だった。つらくて、つらくてたまらぬ、叫び…なって、ドウクツ内に、そこまで、一なとなって響き渡る。

「この、バケツの水のなかに…青酸カリが、はいっているんだ…」

こらえきれずついに涙が、声なのだ。そして、ふたたび涙

ていたんだ…〉

あたらしい、ふるい涙がわいてくる。目からあふれて鼻からも流れでる。

〈それなのに、いまここで、戦友のきみたちを、二百五十余人も殺戮してきたおれたちが、殺さねばならぬとは…〉

衛生兵たちは、みんな泣いていた。そのむせび泣きの声は、つよく、はげしい祈り、そのもののように、ひびきこもっていた。

〈ああ…これが、さようならか…これが、さようならというものなのか…〉

怪たまの重傷者たちは、しーんとして、声もなかった。身動きできない彼等—その宿命に、藤沢軍曹、五味伍長、〈略〉

命令—〈—人衛生兵は、二号病室、三号病室、三号病室、〈略〉

三人は、それぞれ容器を手にとり、バケツから水をくんだ。命令された受けもち場所へ散る。重傷者の口もとへ容器をあてがい、ひとりひとりにのませ、涙

重傷者全員、声をかぎり、命あるかぎり、涙をながしながら—

『七師団戦記・ノモンハンの戦闘』の予約出版を受け付

戦記係から

ひめゆりの塔。一日も復興がたえたことがない

七師団戦記

あゝ沖縄

<155>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

うなされる

狂ったように叫ぶ

重傷者の処置で疲労

廣沢軍曹と五味伍長は広い三号病室に立ちつくしていた。広さが、いままでよりいっそう、広く感じられる。灯火も油がきれて消え、めっきり数がすくなくなった。岩からもれてくる雨だれが、ドウクツ内のトタンにあたり、ものすごい音でこだまする。

いま、ここに生きているのは、廣沢軍曹と五味伍長のふたりだけ。ぼんやり立っていたふたりは、どちらからともなく歩きだし、ちらかっている眼鏡のなかから、適当なものを見つけて、掛けかえた。

ふたりは大広間に戻った。寝台の下にちょうどいい眼鏡があった。毛布、炊事道具、食糧をはこびこみ、深いねむりにおちた。

×　×

爆発音に金神経をたたかれたすごい震動―目を開いたが、ドウクツ内は白煙モウモウで、なにも見えない。

「ウ…ウ…ウン…」五味伍長がうなった。

「あ、だれだ…だれだ、まくらもとに立っているのは…」

五味伍長がうなされている。

しばらくして、また―

「あッ、大水だッ…大水だッ―」

狂って叫ぶ五味伍長。重傷者の処置で、気がおかしくなったらしい。

廣沢軍曹は、じっとしていられない気持ちになり、伍長をゆさぶりたけている。夕食の準備をしているうちに、ほかの者は出発し、おざなりにされたのであるが、ドウクツ内は白煙モウモウ。

炊事場へ出た。カマのなかへ人糞のやつ、入り口に極楽鳥に、あたたかいめしが、ひっしゃりたけている。夕食の準備をしたままなのだ。牛肉のカン詰めい…

三、四個あるけど、カマのなかへ、毛布をかぶり、じっとしていた。自然とウドウツの入り口に、腰掛すれば寝るほど大きくなる。埋没の心配はなかった。

「どうせ、おいてはりやくったんだ。ここにいようじゃないですか」

五味伍長は、やけくそ気味。

釘もと安心とねむけ。そのまま時間が経過する。二、三時間たったようだった。白煙も薄れ外は夜の気配だ。

廣沢軍曹が、方向をかわる間隔をおいて熟睡中だ。まるで酒宴でもしているような気軽な調子だ。

軍曹が、近くを見ようと、銃眼から身をのりだした時―「エヘン」と、銃眼の反対側から咳ばらいが聞こえた。

あわてて首をひっこめ、耳を澄ます。別の銃眼から外を見て、ビックリした。

眼前十五尺に五名ほどの米兵が片ひざをつき、銃口を銃眼に向けて、引きがねに指をかけ、ねらいをつけている。そのなかの米兵が銃口をかしこんでいる。そのなかの米兵が銃口をかしこんでいる。

「おい、五味、聞いてくれ。」

ドドド

七師団戦記

あゝ沖縄

<156>

戦没一万八十五柱の雲にささぐ

死臭の中さまよう
暗やみのドウクツを

雨たれの音

脱出は不可能！悪沢軍曹は判断した。だが、敵陣となったところの地上に、とじこもっていることも不安がつのるばかり。五月六日、五味伍長と通れたって、敵陣のなかにしのび出た。ふたりは、照明弾と銃撃に、水田のなかをはって進んだ。敵出だった。気がついたとき、五味伍長の姿がなかった。

〈戦死しちゃったかな！それとも、うまく逃げてくれたかな？〉

安否を気づかう思いが、一瞬、頭をかすめる。しかし、まっくらな、マッチは、水ぬれの雨たれの音。ぼくはつぶやいてしまった。

〈五味はいない。この広いドウクツは死人ばかりだ。大きな墓場なんだ。生きているのは、自分ひとり…〉

胸をしめつけられるような孤独感。突然、やみのなかから一

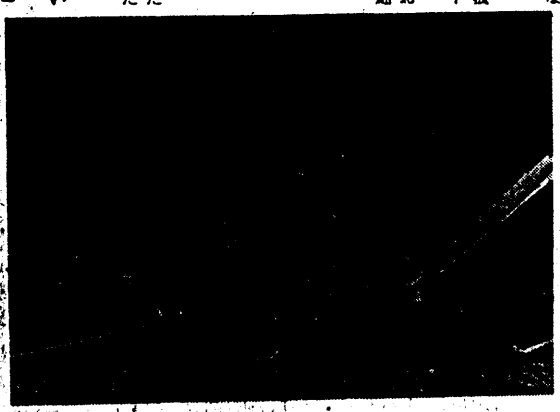
「だれだっ！」

異様な大声がこだました。おそろしさに縮毛だち、全身が細

〈このタマのなかだ。きっと手さぐりで進む。いままでいたる思い。

つた。ムッとする死臭、ザワザワと無気味なウジの音のなかを

〈ここに、処置しなかった傷者が生活している〉



〈このドウクツ内には、百人ぐらいが収容されている〉

「誰だ、悪沢軍曹だ。わからないか？」

「わかりません。だれでもいいです、私にカンパンをください」

〈かわいそうに腹をすかせて…〉

「いまはない。俺も腹がすいているんだ。見つけたら持ってくるぞ」

「あ、そうでありますか。たのみます」

〈二号洞窟へ行けば、カンパンもあるか。炊事場へ行ける〉

軍曹は、足もとに気をつけ、そろり、そろり奥へ進んだ。

ポクーン！ポクーン！

静まりかえるやみに、軍靴だけが、トンネルをてひびく。

〈二号洞窟だ〉

雨たれの音をたよりに進んでいった。つまずいて倒れるんだ。雨たれの音は、あちこちから聞こえてくる。耳をすませばすますほど、どちらから聞きこえてくる。どっちへ進めばいいのか、進む方向が、全然わからなくなった。

〈そこいい、どっちにしろ、やけくそになって進む。足もとがいまは方向がわからなくなる。突然、無気味な笑い声！

「イヒッヒッ、ヒッ、ヒッヒッ！」

戦記係から
協力・ノモンハンの死闘」のご提出感謝
けけけ出です。

筆者　山形三郎・福島県下成
一郎・長野県の出身
だれか、トンネルを
ひく。

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

<157>

手りゅう弾を発火

マッチ代わりに使う

笑い出は、ドウクツ内にただまも、ゾーッと冷水をかけられたような感感。からだがぶるぶるで動けない。

〈ああ、ここにもとり、処置しなかった負傷者がいたのかとり残されてかわいそうに〉

声をかけた。返事をしない。ふたたび、「おいッ」と呼んだが、ヒッヒッ…と笑うばかり。

〈気がくるっているな〉

そのままにして廃墟部隊は笑へ進んだ。大きな岩につまずいた。倒れた。とたん、足が曲ったき、からだが、奥の底へすいこまれた。落ちたところで、背中と腰を強くうった。痛う

たっ…力をあがれない。腰が一瞬間中…まで、ぐったりへたばってしまった。

〈この穴のなかで、おれもいよいよ最期か〉

そう思うと、急におそろしくなってきた。手と足に力をこめ、穴をよじのぼりはじめた。腰れたとか痛いなどと、いってはおれない。

やっと穴からはいあがった。さぐり歩いておぼえのある通路に出た。その通路をつたわり、まえにいた居室へもどった。

〈なつかしいなあ〉

平間は安心と疲れで、そのままぐっすり寝込んでしまった。

× × × ×

気がついてみたら、夜がすっかり明け、全身がすっぽりぬれて寒い。〈全身がすっぽりぬれで寒込んでいた。

〈火をたかねばならぬ。だが、マッチは使えない。…そうだ、手りゅう弾を発火させ、その火をガソリンに移してやる。

市切れにガソリンをひたし、手りゅう弾を発火した。火が燃え出る。火はつかない…投げた。

そこへ、市切れをなげた。火が燃え、地面に落ちるまえにサクつかない。四秒間で爆発が。あ裂した。もう一瞬おくれていたらどうなっていたか…〉

× × × ×

「ドーン」

「ドーン」

サク裂音に目をさました。ぐっすり眠ったせいか、気分はそう快。

〈敵の手りゅう弾だ〉

同時に、からだをはうノミの多いのにも気づいた。

〈どいつ、ノミだ、ちきしょう…〉

あっちも、平服のうえから、しきりに、からだをかく。

その服である。

〈ストルで、ガソリンのしみた市切れを撃ち、火がえられるかもしれぬ〉

そう思った。

〈既に市切れをあって、引きがきまいた。思ったより大きな音。あわて、あたりへ目をすます。市切れは、火がつかない。がっかりする。気合いがぬけて、すわりこんでしまった。が、その時、あるアイデアがひらめいた。

（次号ドウクツというのは壁ぎわウセ、棚がたりない気が、天井からつらつのようにぶらさがっている）

切れをひろいあげ、平刀で、切ってキリをつくり、板の中央にあてて四手でもむ。

〈原始人は、こうやって火をキリをあげ、手がまたかゆ。つ感じがする。疲れが出て、そのまま寝込んでしまった。

読者から

「七師団戦記」ノモンハンの項に「第一部隊を指揮付け中ヒ」

訂正 山田三郎七五歳陸軍上等兵の項へ九ぺん（九州市）

一部隊の項へ九ぺん（九州市）

七師団戦記

あゝ沖縄

<158>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

洞くつに置き去り

敵中で原隊へ戻れず

みな自分の戦争も忙しい沖縄の春天。地獄の中の地獄——銃弾飛び交う大砲にかかげられた重次郎塩のほり幕。

さびしい

〈弾丸だ…どこかに弾丸があったはずだ。あいつなら、はだで火をふくから、きっとうまくゆく…〉

藤沢軍曹は、手さぐりでさがしはじめた。岩や長やらかんづめのあきカン、その他いろいろなものが手にふれる。

〈ないぞ、メクラが金をさがしているみたいなかっこうだろうなあ〉

いくら探しても、弾丸がみつからない。いや、手にふれない。

すみからすみまで、ようんばいになって、手さぐりで行ったり、きたり。ひざがしらを痛め、我しはじめてから二時間くらいして、やっと、一本の弾丸を拾ったばっかりのとき、すぐ、ガソリンのはいった缶を手と指切れをとりよせ、弾丸に着火した。

〈シューッ〉と、花火のように吹き出す火、軍曹はその火を、ガソリン缶目にあてた。ガソリンが爆発的に発火した。さいしょ、ドクッ内が膨らし出され、白い煙りを吹き出している。軍曹は、広場のほうへ投げた。

〈よし、めしの準備だ…〉

× ×

こうして、藤沢軍曹の一人ぐらしが、はじめられたが、二日目になると、ひとりだけ、この世とはのこされたような心細さにたえきれなくなった。入り口付近では、相変わらず爆発音がしていたが

〈ちょうどいい。地獄人の番ぐ、敵しいぞ〉

原隊へかえろう〉

そう決心した。すると、生気が体内にみなぎり、いそいで、軍服を着てゆこう〉

軍服のうえから、バンコウの皮で編った帯をきる。広場で

原隊の上官、戦友たちの顔が目先にちらつく。希望がわいてきて、口笛をふきたくなるほど、胸がワクワクする。楽しい。どうして楽しいのかわからないが、楽しい。

めしは、アルコールでたく。早い。かっこう世とりのこされたような心細さにたえきれなくなった。入り口付近では、相変わらず爆発音がしていたが

〈ちょうどいい。地獄人の番ぐ、敵しいぞ〉

原隊へかえろう〉

そう決心した。すると、生気が体内にみなぎり、いそいで、軍服を着てゆこう〉

軍服のうえから、バンコウの皮で編った帯をきる。広場で

る。

〈脱出のコースは、広い三角洞窟の出口から、あのガケ伝い…〉

頭のなかに、浮じがらかんでくる。ロウソクに火をつけた。軍曹の火は消えずにおくれ。広場から洞窟に出た。外が、かすかに見える。明るいが、しずにあがっている。外の空気

〈出口のうえにだれかいる〉

すると、前方に人影を発見した。

〈だれだ！…ここは敵の陣地だったぞ〉

がっかり。体内の力がぬける。原隊へ戻ればせっかくの苦〈ひきかえした。

〈原隊へもどることは、ゆるされない。生きるか死ぬか…〉

そう覚悟しいまかせ、いつとはなく眠りにおちた。

× ×

ふ、眠、眠さめると、またまた、じっとしていられないぞ。ひしゃ、あせりを感じた。

がっかり。勇気を出して進もうとしたとき、軍上から爆弾で崩れ、人間がきえた。

〈出口のうえにだれかいる〉

すると、前方に敵の影を発見した。

〈だれだ！…ここは敵の陣地だったぞ〉

がっかり。体内の力がぬける。原隊へ戻ればせっかくの苦〈ひきかえした。

〈原隊へもどることは、ゆるされない。生きるか死ぬか…〉

そう覚悟しいまかせ、いつとはなく眠りにおちた。

× ×

ふ、眠、眠さめると、またまた、じっとしていられないぞ。ひしゃ、あせりを感じた。

編集後記

「七師団戦記」ノモンハンの戦闘の予約出版を受付ています。

明治、山梨県甲斐郡生まれ。一高卒業。ハルピン（満州）・ハルピン。

七師団戦記

あゝ沖縄

<159>

任務終了

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

〝帰れたぞ、原隊に…〟

月夜の脱走—ただ涙

〈とにかく、行けるところまで行ってやれ〉

やけ気味になった慶沢軍曹は医務用アルコールを一名に二合(〇・三六㍑)ほどのんで、一号病室の入り口から飛びだした。

外は霧雨が降く、寒気、しずかだ。人の気配もない。闇夜がたくさんあがると、明るくなるが、脱走にはもってこいのおぼろ月夜だ。

軍曹は前かがみに、上半身をまげた姿勢で歩いていた。酔いがまわり、動悸(ママ)がはげしい。くるしいが、敵の目をさけるためにはやむをえない。

静かな晩だ。ともすると、敵に対する警戒心がうすれる。酔いがまわり、神経が太くなってもいたが—

起伏の多い地形にぎっしりかこまれた、黒闇闇に、くっきりうかんだ。ここをすぎれば、宜野湾から安里に通ずる街道を中心とする一面の平地になるのだが、ふつかった部分のある地点は、米軍の第一線になっていた。見上げると、台地上のあちこちからヒキばらいや話し声が聞こえ、右側の高地線は、しきりに照らまくっている。

軍曹は、目の前にガン銃の銃があるのを発見し、二個ぬすみとった。

と、頭上へ視線をなげると、黒い人影が軍曹のほうに向かって、まっすぐおりてきた。あわてて、ガン銃めがけとべも上に、中腹から下へおり、左へ回りながら斜面をすべりおりた。

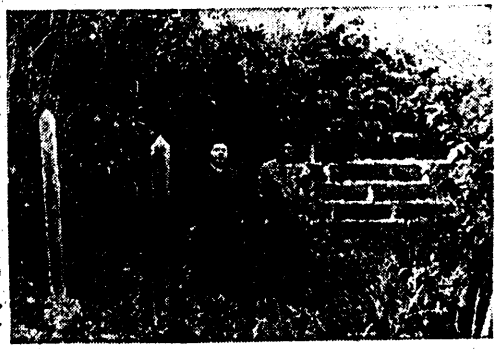
右手は絶壁の傾げ落ちたあと、前方は水田。そのなかへすべりとび、敵が四、五名ほどのびている。はって進んだ。最近、宜野湾付近の線まであがり、敵の砲撃をあびて、二名なにかぐらをかいて、前方のいがまわり、神経が太くなって

安里から右側の八重瀬岳の斜面は、黒闇闇に、くっきりうかび上がり、敵の砲撃をあびて、二名なにかぐらをかいて、前方の岩石がさかんに飛び散っている。

〈ものすごいなあ—これからあそこへ飛び込むのは、たいへんなことだぞ—〉

敵のりゆう弾に当れなかったら、軍曹は、真弾に導する道を伝って進む。友軍の弾薬庫がせこちに見えはじめ、弾薬の集所が集中して、すさまじい。夜は、すっかりあげていた。慶沢軍曹

しかし、行かねばならぬ。水田からはいあがり、枕のかげを走った。友軍の弾薬庫がせくなったため、敵の銃撃弾が集中して、すさまじい。夜は、すっかりあげていた。慶沢軍曹



北海道戦没者の遺骨が、この真栄平の遺骨にたくさん収容されているが、戦没者ゴースがはっきりしていないため、取りやすくない。十二月末出発の遺骨は、よく調べてやることが大切である。

〈やっと敵陣に帰ってきた は、疲れはて、気絶に近い。そ、これで、自由のからだ〉

した。水がめ、慶沢軍曹の計画

に立ち、野戦病院野戦病院の兵士は、野戦病院野戦病院の兵士は、後を追いかけた。枕、まいと思いながらも、眠いっぱいになり涙があふれ落ちた。

五時間目は、あの夜、無事帰陣したりついたが、二日目に軍医部で戦死したーとかされ心からあの様を祈った。

夕方まで休養をとり、生気をとりもどして、新垣の軍医部に帰りついた。そこで、井田曹長、西田曹長、松田曹長と手をとりあって、生きているとをまろこびあった。

軍医部長と根本大尉、民政少尉に、野戦病院の状況をくわしく報告、軍医軍曹の多数だった任務は終わった。

× ×

それから十日後に、新垣の友軍は本隊、軍曹は生き残った軍医部員をつれて、敵中を突破し、ふたたび、野戦隊のあの野戦病院のドウクツへ戻る運命にあったが、それはあとにする。

「七師団戦記・ノモンハンの死闘」の新田隊を連載中です。

戦争体験から
紀・ノモンハン
一部写真の提ハルさん利用中。

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

目前で六台相次ぎ

『友軍』と叫んだとたん

友軍戦車全滅

（工兵の活躍137回につづく）

伊坂兵長（羽曳野第一国民学校）らの戦車地雷敷設は毎夜つづけられ、敵戦車六台を炎上させた。友軍の戦死者も二中隊の木村一等兵（山口県木間、補充兵）が九日夜戦死したのをはじめ、数十人にのぼった。地雷敷設に並行し、切り込み隊も毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それでも次時間に起きなければならない。

患者の負傷箇所をメモ、食後出発。ろから五人くらいを手伝い、毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それ

伊坂兵長（羽曳野第一国民学校）らの戦車地雷敷設は毎夜つづけられ、敵戦車六台を炎上させた。友軍の戦死者も二中隊の木村一等兵（山口県木間、補充兵）が九日夜戦死したのをはじめ、数十人にのぼった。地雷敷設に並行し、切り込み隊も毎夜、各中隊から出撃していった。

× × × ×

高野衛生伍長（三笠市岡内住吉町四三七）は、大軍部落の陣地についた。部隊長の佐藤医給責任と無事をよろこびあい、朝まで語りあった。高橋上等兵が前線から帰ってきた久野軍医大尉を迎に、朝岡上等兵、青木軍曹五人は、五月十日ごろから消息に不明になった。

午前中は、各中隊から歩いてくる負傷者の治療。午後は八重岳の戦闘。

弾薬輸送トラックが前線からもどると、必ず負傷兵を運んでくる。その応急手当を終えるのが早くて午前一時、朝の三時になることがしばしば。それ

うので高野伍長らは立ちつめた。大軍の人は、よく協力してくれた。また、彼らの治療もしたので、新生隊は食糧には不自由しなかった。

木村上等兵が前線で負傷し、後送されてきた。傷がなおり、あす前線へ復帰するというこんでいた夜、高橋を出して苦しみだした。負傷兵には、破傷風

五月十一日、第二中隊は猛攻

大軍部落の人々が、山の中に避難したあと、茶わん、ナベなどがちらばり、畑はたが荒くすすけていた。

負う。行くては、艦砲、迫撃砲の雨の中。

間隔を五、六尺あいて走り出す。まがりくねった坂道だ。首里城まであと二百尺の地点へ着いたとき、うしろから戦車八台

七師団戦記

あゝ沖縄

<161>

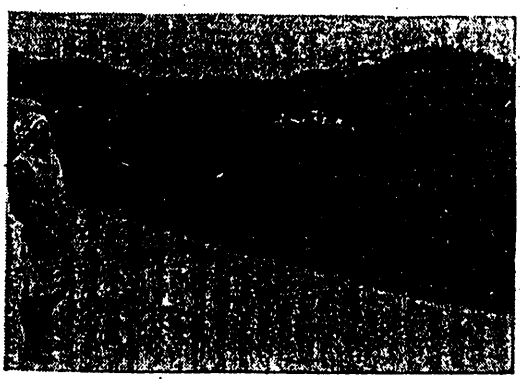
斎藤少尉

刀を抱き座ったまま

胸に敵弾を受け絶命

戦没一万八十五柱の霊にささげ

◇戦況のつぎは、自分らだけ
まごまごしてはいられない。マ
伊坂兵長らは、いっせんに駆け
だした。
前田部落につく、江井中隊長
はじめ戦友たちが
なつかしがって迎
えてくれた。
兵長らは、前線
に二日目の補
充兵長、西尾二等
兵長（夕張）が右に
たいして（大隊部）に
急報した。相模で
前線の一日場の本
部まで送ることを
命じられる。既に
なった。六人で担架をかつぎ二
人は、うしろから梅し八人とも
前かがみの低い姿勢で歩く。姿
勢を高くすると弾きれる。そ
れはわかっているが、疲れてく
ると姿勢が高くなる。苦しい、
つらい後年。
その間、部隊をいきなりう
あのめされたようなショック。
くんの夜にかかった。待ちかま
えていたように迫撃砲が、一
行八人をとらえた。来ると思
時車がやられた地点だ。
続け！山びとも声とも聞き
れなかった。九人とも、いっぺ
んに吹き飛ばされた。一瞬爆風
が落ちてゆく。
伊坂兵長らは、いっせんに駆け
だした。
前田部落につく、江井中隊長
はじめ戦友たちが
「武藤衛長殿ーッ」
と叫んだ。それ程として耳
に聞こえない。パンパンとだれ
の手足か、空から大雨でも降る
ように落ちて来た。そのまま、
しーんとして、どこからも人声
が聞こえない。
兵長は呼び出した。敵は、や
みのなかを見通しなのか、狙り
出す兵長の前面へ、前面へと部
隊を乗り込む。行ってもやさぐ
かのようだ。
（これでは、海岸道をさがし
ても多メだ！）
そう思い、足をとめたとき、
だれかが泣きわめきながら飛進
いのように、かけ寄ってきて
ゆくのが見えた。
その瞬間、部隊をいきなりう
あのめされたようなショック。
目がくらんだ。意識がうすれて
ゆく。
（くそッ！こんなことで…
これくらいで、やられてたまる
かッ！）
だが、スルスルーと、からだ
は地に吸収された。
（めざしの山に、陣地があって…と教えてくれた前田部落の婦人）



人間は死なぬぞ、死んでたまるか！
虫のように地面をはいながら、なんどもなんども自分にいい聞かせた。
この夜、武藤衛長、工藤二等兵（ノモンハン帰りの内地出身）山田一等兵（北海道・補充）が、おおおしている。ここは敵に包囲されたとの情報に、伊坂兵長ら第一分隊、菅川曹長の指揮にはいって救援に出動した。
せまい谷間をとおる。左田の高地のなかを谷間に立ち、軍刀をよりかざして進んだ。
部下は隊長の鬼神のような勇

× × × ×

斎藤少尉は、五月五日の第一回切り込み隊長として、勇敢な敵陣のなかを谷間に立ち、軍刀をよりかざして進んだ。
部下は隊長の鬼神のような勇猛さに、前線に兵士は正気つき、あたりをはいまわった。生きている者は一人もいなかった。だが、その時、ただ一人、どっかとすわっている斎藤少尉を見つけた。うれしさのあまり、近よる間に声をかけた。なんと呼んでも答えない。近よってよく見ると、胸に敵の敵弾をうけ、軍刀を抱きかかえて目をカッと見開いたままだった。

× × × ×

五月十二日、前田の友軍陣地
斎藤少尉も、のめるように倒れた。ただむっくり起き上がりふたたび前へ進んだ。ふたたび、敵の二発目。少尉は軍刀をつえに、どっと地面にしりをついた。そのまま動かなかった。
生きている兵隊は、戦友のしかばねを踏みこえて突撃し、一命を投げすてて切り込み隊の任務をはたした。
翌日のほった。やけつく砂漠に、前線に兵士は正気つき、あたりをはいまわった。生きている者は一人もいなかった。だが、その時、ただ一人、どっかとすわっている斎藤少尉を見つけた。うれしさのあまり、近よる間に声をかけた。なんと呼んでも答えない。近よってよく見ると、胸に敵の敵弾をうけ、軍刀を抱きかかえて目をカッと見開いたままだった。

（あとは、斎藤上等兵（小樽・補充）、新田、吉谷二等兵（中野）、ならびに故江井、中隊長に負傷した伊坂兵長は、やっと日本に たどりついた。

× × × ×

五月十二日、前田の友軍陣地
第一回の切り込み隊に参加し、生還した相模上等兵が、斎藤少尉、戦況状況をつぎのように聞かせてくれた。

戦争は、ただ、ただ、ただ、
戦争は、ただ、ただ、ただ、
戦争は、ただ、ただ、ただ、

七師団戦記

あゝ沖縄

<162>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

布施上等兵は、ノモンハン帰りの猛兵で、敵の自動小銃を一丁みやげにして伍長になった。なお、この切り込みで戦死した人々は、次のとおりである。

（伊坂重市兵長調査）

＝羽幌町築別炭鉱＝

斎藤重博中尉（札幌四二東一）内藤軍吉伍長（出身地不明・ノモンハン帰り）北条上等兵（札幌・補充兵）石田上等兵（出身地不明・補充兵）高橋吉郎上等兵（小樽・補充兵）木村一等兵（出身地不明・補充兵）太田軍曹（札幌）阿部上等兵（出身地不明・ノモンハン帰り）佐々木上等兵（出身地不明・補充兵）金城一等兵（沖縄）山城一等兵（沖縄）キャンロー一等兵（沖縄）丸山久芳軍曹（秩父別町・ノモンハン帰り）浜中友一軍曹（木古内出身・ノモンハン帰り）小笠原徳伍長（小樽・補充兵）

人のうち、たちまち、安里一等兵、中野上等兵が戦死。生き残り

不眠不休

布施伍長の話は、伊坂兵長には、これから自分が直面するはげしい戦闘を物語っているように思われた。兵長は心からなき戦友のめい福を祈った。

〈斎藤中尉も見ておられる。俺も、りっぱに任務を達成して、戦友たちとあの世で顔をあわせようこう決心した。

香川聯長指揮の救援隊は前田部落に到着。十人ぐらいに分散して、友軍の小さなゴウにはいった。

伊坂兵長は八人の戦友と、いったん、野戦隊のゴウにはいり、そこに三浦兵長、木村上等兵、高橋一等兵の三人を残し、兵長のとなりのゴウにはいった兵長と中村上等兵、山田一等兵、フチヤクシユンブク一等兵は、香川聯長の命令で、斎藤中尉の戦死体を埋葬した。（当時（五月十三日）伊坂兵長が勤務を交代して戻ってくると、中沢上等兵が監視所の入り口に倒れている。監視所の中には、沖縄出身の兵隊が、うつぶせになって死んでいた。

兵長は、兵長のとなりのゴウにいた。赤星一等兵が兵長ら三人の塹壕作業を手伝った）

まうにいた野戦隊のゴウへ戻ってみると、残した三人は戦車砲弾の爆中射撃をうけて飛散し、ゴウはあとかたもなくなっていた。

迫ってくる米軍の戦車

夜になった。二人ずつ監視所が、急を知らせに走る。伊坂兵長は倒れている二人を抱きかかえると、ユンニヤクのようで、死体の整きがない。

中村上等兵が駆け戻ってきた。

「軍長殿が、明まで待ってられといっているぞ！」

命令には従わざるを得ない。夜のあけるのを待った。

東の空があかるくなりかけたころ、伝令がきた「引きあげろ」との命令だ。

眠れもせず、一睡もしないで夜明け。兵隊はつぎつぎに引きあげ、戻ってくるのは三分の二くらい。このままなら全滅はまぬがれない。

〈俺もいよいよ戦死だな…〉

死の予感が全身的に迫ってくる。

〈死ぬときは、思い切りあばれて、敵をさしちがえてやるぞ〉

伊坂兵長は、戦死を決意し、敵陣へ踏み込んでの白兵戦を脳裏にえがいた。

戦記係から

「七師団戦記・ノモンハンの死闘」の予約出版を受け付け中です。

顧問　山田三四七五歳陸下真一郎軍長の母ハルさん（札幌市・寄付）

いよいよ全滅か——

休まず次々攻撃へ

七師団戦記

あゝ沖縄

<163>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

応用投テキ

「山砲弾」を素手で……

ゴウ入り口の海兵隊目がけ

五月十三日午前十時ごろ、三十人ほどの敵兵が、がけの高地からゴウの入り口に迫ってきた。赤鬼のような大男たちは、入り口から爆薬を投げこむ。

〈馬のり戦法だ。屋間、よくも大胆に肉薄してきやがったな〉

「伊坂兵長と土井伍長は、敵者を守っていてくれッ」

香川軍曹の絶叫。兵長が振り向くと、手りゅう弾を持った軍長の走り去るうしろ姿。すぐ伊坂兵長は、となりのゴウへ走った。

「班長ッ伊坂、まいりましたッ」

土井工（たくみ）伍長は、ひとりで敵に手りゅう弾を投げていた。

「おッのたのもう」

手りゅう弾を投げ、ゴウの入り口にかくれながら、土井伍長の元気のいい叫び。と同時に入り口で敵の手りゅう弾が、四、五発一度にサク裂した。

間髪をいれず、土井伍長は、入り口へ飛び出し、敵兵めがけて手りゅう弾を投げた。この勇猛な手りゅう弾戦で、伍長はずでに十人ちかい敵を倒していた。

敵の手りゅう弾が伍長の足もとに落ちた。伊坂兵長は鉄砲玉のように伍長に突進、体当たりでふたり一緒に四、五メートルほどさきへとびがる。手りゅう弾サク裂。

みじかい叫び。伍長は両手で頭を押さえる。その胸もとに鮮血がひろがる。手の指をつたうのも赤い血―伊坂兵長も石ほとに破片をうけ、頭がグラグラする。土井伍長は即死だった。

その夜、兵長は、伍長の遺体を埋葬した。

× ×

敵の攻撃は夜どおしつづいた。十四日朝になる。敵におされ、もうどうにもならぬ。

敵は白い軍旗（きゃはん。足にまく布）に小さなリュック、腰に六発の手りゅう弾をさげ、自動小銃をかまえた海兵隊員だ。エンピ（携帯用小型スコップ）をクワのように使い、自分が通れるだけの交通ゴウを掘って進ってくる。それが列をなし、十列も十五列にもなってじりじりと攻めてくる。

向かいの山には、敵のソ撃兵（小銃でねらい撃ちをするのが任務の兵隊）がいる。彼らの眼鏡つきの小銃はヤミのなかでも命中確実という精度のいいものだ。それで屋間、援護射撃をやられるのだから、伊坂兵長らは手も足も出ない。

いよいよ十五日午前の陸用爆薬（とうてき）を使うことになる。これは、山砲の砲弾を筆つと酒（つつ）がわれ、そばにいると自爆する危険なものだ。その酒も三、四本しか残っていなかった。

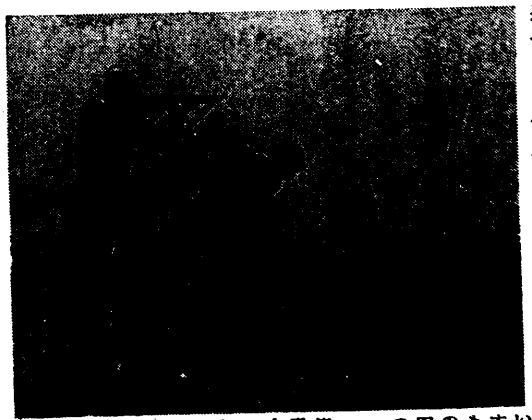
〈酒は、使えない。素手でやれ〉

伊坂兵長は、山砲弾を二発かかえ、せまい交通ゴウを走ってゴウに飛びこんだ。

休びまもなく、砲撃の安全センを抜き、両手で持ちあげて力いっぱい、ガケ下へ投げた。五、六秒経ったところで、〝ガガーン〟と爆発音。すぐ、つぎの砲弾をその後のほうめがけて投げる。

中村上等兵は左足負傷。山田一等兵は手りゅう弾で左肩と右中に負傷。宗屋一等兵、布施伍長のふたりは足をやられているのに、信じられないような早さで、山砲弾を運んでくる。

伊坂兵長も、できるだけ早くそして、遠くへ投げることに決頭、十二、三発を投げつづけた。ヒュル・ヒュル…と風気味な音が、空中を突進してきたのはそのとき。



自動小銃を、撃つ米海兵隊員

戦記・ノモンハンの教訓」の予約出版を受け付け中です。

戦記係りから

「七師団戦記」

戦記係りから

戦記・ノモンハンの教訓」の予約出版を受け付け中です。

編集・山田三郎七五歳歳・真一郎軍長の孫（ヘルさん）（北海道市・神奈）

七師団戦記

あゝ沖縄

<164>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

切り込み

ほとんどが負傷兵

敵弾の中へ飛び出す

不甲斐感受するカンは、異様なまでにするどくなっている。戦友たちは、飛び散るように姿をかくした。

〈あぶないッ／逃げよう〉

一瞬、胸騒ぎとさ迫る危機感。伊坂長長は走ろうとした。が

〈待て、待て…逃げても山砲弾が爆発すれば爆風だ〉

思いとどまった。

そして

〈どう死ぬなら山砲弾を七八発浴びかかえて死のう。かけもかたちもなくなる。兵隊らしい死にかただ〉

兵長は、抱みあげた砲弾のうえにうつぶせになり、両手でタマを抱きしめた。

異様な音は、敵の十二連装（そう）迫撃砲弾のうなりだった。ソ連では効果なしと見た敵は、みな殺しを強行して、迫撃砲を使いはじめたのだ。二行おきにサク裂する砲弾が、山のうえ一面に穴をあける。連続するサク裂音と振動で耳がとまりそう。

〈もう、だめだ…〉

意識がうすれる、なにか白いものが、からだのうえに落ちてきて、押しつぶされるような感じ。もう、それもはっきりした神経の反応はしめさなくなっていた。

× ×

寒むけを感じた。地の奥底からゆすられるような振動が、からだにつたわってくる。

〈生きていたのか…〉

頭をあげようとした。硬くて動かない。しゃりに頭をあげようとすると、何度かうごこうとしているうちに、ようやく頭があがった。

一飛（迫砲弾）の光りのほかは、なにも見えない。

——みんな、なにもかもわからなくなっていた。

記憶によれば昨日六月二日の午前の明かさした。たずねたずねて、やっと中隊のゴウに辿りつくと、中隊長（江井中尉）戦友たちは、喜びあがらんばかりにおろこんでむかえてくれた。

しかし、敵の猛攻は、こちらに寝るまも、めしをくう時間もあたえない。緊張と疲労と殺気——みんな、なにもかもわからなくなっていた。

記憶によれば昨日六月二日の午前六時ごろ。伊坂長長は、戦友たちとカンパンを三つか四つかじってカラカラにかわいたのどに飲みくだしたときだった。

「敵だッ！」

赤星二等兵がゴウに飛び込んできた。陸視所にいた彼の緊張が、そのまま江井中尉に伝わった。

「第二分隊ッ第二分隊ッ、切り込み用意ッ！」

中隊長の命令に、二、三人、サッと立ち上がった。伊坂長長は

〈夜になっていたのか…〉

胸のところでヒヤヒヤしているものを見た。山砲弾が、冷たく光っている。

フラフラしながら立ちあがりあたりを見回した。地形がすっかり変わってしまっている。迫撃砲弾のすさまじいサク裂にえぐられ、どこが、いままでいたゴウなのか見当もつかない。

〈中隊は、どこにいるのだろう？〉

行きあう兵隊にたずね、工兵隊の初年兵をうながし、敵弾のなかへ飛び出していった。この時二分隊で、負傷していない者は、中隊長の命令に、二、三人、サッと立ち上がった。伊坂長長は、中隊長の命令に、二、三人、

行きあう兵隊にたずね、工兵隊の初年兵をうながし、敵弾のなかへ飛び出していった。この時二分隊で、負傷していない者は、

有加伍長は、衛生一等兵、神中です。

顔写　山梨二四七五民間下瓜一郎軍長の祖父ハルさん（秋田市

戦記係から

『七師団戦記』・ノモンハンの死闘」の予約出版を受付けます！

「よしッ伊坂、俺が先行する

はこの三人だけだった。

米軍兵隊の日本軍陣地砲撃を見守り、攻撃待機中の米海兵隊

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

布施伍長

口から血ふき出す

絶命寸前の班長

布施伍長ら三人のうしろ姿を見ながら、伊坂兵長は、おのれの心の声を聞いた。

〈負傷者といえど、動ける者は隊員ではないか！なぜ、行かぬ〉

すぐ兵長は、中村上等兵、フチヤクキンブク一等兵をひきつれ交通ゴウを走った。

しばらく行くと、意外なことに、むこうから赤畠一等兵が駆け戻ってくる。

「どうしたッ？」

兵長がたずねた。

「班長殿が…」

あとは声にならない。赤畠一等兵がなにを言おうとしているのかわからない。

「どこだッ」

兵長は気がせくまま、赤畠一等兵をかきわけて暗闇のほうへ走った。二十メートルほどきたところで、兵長は、ギョッとして棒立ちになった。

交通ゴウにあぐらをかいてすわっているのは布施伍長だが、その両眼は飛びだし、顔面からも胸にかけて一面血潮にぬれ、なにがなんだかわからないほどの重傷である。

「……」

伍長が何か言おうとして、口からバンバン血をふき出す。真っ白な軍手をはめた右手が、ちぎれそうになってふらさがっている。

〈だめだ…〉

伊坂兵長は、布施伍長の戦死を即断した。が

「班長、いますぐ担架がくるッ」

と声をかけ、伍長の肩を揺ぶって敵のいる方向へ進んだ。

戦闘のウズーそのなかへ、みず から飛び込むことによって、この怒り、悲しみを忘れたかった。

がけの上から、一斉に手りゅう弾を投げつけられた。

こへ飛び込んだ。つづいて、中村、フチヤクが飛びこんできた。見れば、ゴウの中は野戦隊の負傷者ばかり。

〈敵の奴ら、やりやがったな〉

兵長は、手りゅう弾をにぎりしめた。

米軍を、さんざん悩ませた日本軍陣地

〈まて、まて、上に向かって投げても、うまくあたらない。それより、早くあのゴウへ飛び込め〉

かたわらにゴウを見つけ、そこへ飛び込んだ。

「敵が、このゴウの上にきている！」

兵長が叫んだ。負傷者のなかから叫びが聞いた。

「ガンバンの残る人は口に銜め！」

「よし、俺がやる」

だれかが答える。あわただしく応戦準備。

「おい、みんな、手りゅう弾を持っていたら、くれてくれッ」

兵長が北海道弁で叫ばれた。入り口に、チラッと顔のような敵兵の姿。自動小銃の銃口が向いた。兵長は手りゅう弾を投げた。サク裂。敵は帰ってこない。ゴウ内は、負傷者五、六人しかいないから、手りゅう弾を二、三発投げ、こもれば全滅だ。

「敵の手りゅう弾は、一発目中へ入れるな。負傷兵を守れッ」

伊坂兵長は、中村、フチヤクの戦死に怒り、死角（敵の攻撃のおよばない安全な場所）に身をひそめ、敵がこちらへ近づくのを待ちかまえた。

戦記編から
「七師団戦記」
・ノモンハン、沖縄の戦闘に参戦した部隊を中心に中ヒ。

編集・山崎三郎七五歳第一工業
一部重複の長ハルさん（名寄市）

七戦記

あゝ沖縄

<166>

戦没一万八千五百の霊にささぐ

俺の顔に小便！

だれかがゴウの中へ

全力しぼる歩一歩

伊原兵長の見守るゴウの入り口に、はやぐちのさわがしい声がひびいた。兵長はクッと左身を乗出。とたんに、十人ほどの敵兵が、ゴウの前を横ぎった。

〈やれッ！〉

兵長は、つづけざまに手りゅう弾二発を投げた。三発目を投げようとしたとき一発の手りゅう弾がゴウ内に飛びこんだ。

叫びともうめきともつかぬ声。ゴウ内は火薬くさい煙におおわれ、みんなむせび苦しむ。兵長は、左腕と肩に負傷した。だが、そんなことにかまってはいられなかった。

「手りゅう弾を、つづけざまに二三発投げるから、あるける者はそのすきに外へ出ろ！」

叫んで投げた。兵長が一番きき飛び出す。そのとたん、敵に囲まれた。小銃弾がかすった中、中村上等兵らひっこをひいてやってくるフチャク一等兵にあう。うしろに、三人の兵隊をつれているが、みんな顔がまっ赤だ。

「手りゅう弾をもってきた」

弾の雨がなんをねらっておいでゴウ内に

「了兵です。手りゅう弾を五、六発ください。いま、敵の攻撃をうけているところです」

兵長の申しでに並居のひとりが、五、六発の手りゅう弾をきしだしながら

「どうぞ」

とたずねた。

伊原兵長は手りゅう弾に両手をさしだして受けとろうとしたが、左腕が全然うごかない。

「やられている」

平等は、兵長のスボンのポケットにいれてくれた。

ゴウへ戻る途中、中村上等兵らひっこをひいてやってくるフチャク一等兵にあう。うしろに、三人の兵隊をつれているが、みんな顔がまっ赤だ。

大きなゴウの前に出た。軍曹が

「手りゅう弾をもってきた」

手榴しごきない兵隊に、中

……あれから、どのくらいたっ

〈戦死者だな。だれだろう？〉

兵長は、左手をすこしずつ動かしてみた。つめたい人の顔がふれる。

村、フチャクのたちに兵ケットからそれをとらせていたが、右腕中と左腕からの出血がひどく、たんだん目のまえが暗くなり、意識まっくらになって倒れた。

〈日米両軍が死闘を展開した前田の激戦地で、本島から家へ持って帰る間ももどかしく、新刊の少年雑誌に見入る少年ふたり〉

〈たんだろう？〉

〈このままなら生きぬけ。立ちあがってはならぬ。立ち上がって戦友たちとたたかおう！〉

伊原兵長は立ちあがることに全力をふりしぼった。

〈あれはなんだろう……いよいよ立てなければ、はってゆこう〉

一けはず、全力をふりしぼってほう。ぶちているものに右手なのはず。

〈ダメだ……〉

手をうごかしているうちに力ンバンの綱のようなものにふれた。

〈ひょっとしたらもしかしたら、ひょっとしたらゴウのはへ通じているかもしれない〉

ひょっとしたらゴウのはへ通じているかもしれない〉

兵長は、ふたたび力をしぼりはじめた。

〈

七師団戦記

あゝ沖縄

<167>

戦没二万八十五柱の霊にささぐ

死体の中さまよう

工兵のごうを捜し…

あるく幽霊

精にすがり、伊坂兵長はフラフラして立ちあがる。右手で砂をかく。

〈早くここを出よう〉

驚異刀の極限、体力の限界を感じ休んでは掘り、掘っては休み、やっと、カンパンの箱を引き寄せて、ゴウの外へでた。

薄やみにつつまれた死界。目をやられたらしくすべてが、ぼんやりとしか見えない。

白いゲートルの敵兵の死体がちらばっている。指ぬき足をひきずり敵の死体のなかを進む。

〈やられたと思っていたが、敵もずいぶんやられているぞ〉

元気がでた。かちたじゆうこ力がわいてくる。歩みをはやめた。前方に二つの人かげを発見。兵長の顔色に異様を感じたらしい。紙になにか書いて渡いながらしめしてくれた。

（幽霊、ふたたび消える）

しばらく休んだ。本山伍長が、また紙に書いたものを見せてくれた。

（中隊長殿から、香川曹長、伊坂兵長ほか七人を本部へ後退させるよう命令がでた。すぐしたくをして、午前零時に出発）

香川曹長は、右官手じの動脈つり、六月二十二日児玉部隊長指揮隊にかえられ、いつさいの命令で、各自二名・爆薬をもち、戦車、航空基地のガソリン積載所をこへ向かい全員切り込みを敢行、あとに残った部隊長ンの死闘」の予約出版を受け付け中です。

（戦記係から）

「七師団戦記・ノモンハ

戦闘行動を終えた。

〈見たことのないかたちの山〉

案内し、〈小山を指さした。

〈敵かな？〉

向こうは、どんどん歩いてきた。〈そう思った。しかし〈行けば校だ。兵長は工兵隊のゴウをたずねた。ふたりが、さかんに何かいうのだが、その声が全然聞こえない。

〈耳もだめだ……頭をやられたため、目も耳も使えなくなったな……〉

兵長は右手をさしだし、頭をふって、聞こえないことを示した。将校は兵長の手のひらに地図を書いて教えてくれるのだが、わからない。ついに将校は、兵長の手をひいて十数ほど離かいるかもしれない〉兵長は、将校に別れて歩きだした。

〈そうとうついた。帰ってきた〉

なかへはいってゆく。みんなが大騒ぎ—その情景はぼんやり見えるのだが、声はなにも聞こえない。本山衛生伍長が、伊坂兵長は、前田の陣地が十五日朝金縛した一隊の生き残り将兵は、その後、与座岳や上の野戦隊のゴウへ五日、大隊長殿のゴウで救護班すれすれのところに迫撃砲弾の破片をうけ、右脚にも負傷していた。九人は十五日午前零時出発。途中三人の戦死者をだし、大里村与座の工兵部隊本部のゴウに到着した。

× ×

よく十八日、伊坂兵長は、前は軍旗とともに福岡で良民した。伊坂兵長も、たびたび切り込みに出撃したが生き残り、六人の戦友とめぐりあって八月二十一部隊長の徒ヘルさん（札幌市・軍曹）

親字　山崎三四七五部隊下風

米軍陣地へ火炎放射をあびせる米軍

戦記 戦争物語

<168>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

五月下旬の雨の降る夜。山三四八一部隊（工兵第二十四連隊）児玉部隊長（大佐）は手放しみたない部隊葬を引率して、大皇陛下の部隊本部に帰ってきた。前日前線の戦況報告のため、別れのつらい報告であった。

「高野伍長ッ」

前線から帰ってきた中村正男軍医大尉（山口県）によばれ、高野曹之伍長（三重市桜内住、四日市四三）はかけ寄って大尉のくつをぬがせ上着をとりかえた。

「ありがとう」

軍医に大尉の腕をとりあわいだ。いままでとられていた腕しみが、伍長の勇気に感激したようで、顔一面の涙だった。

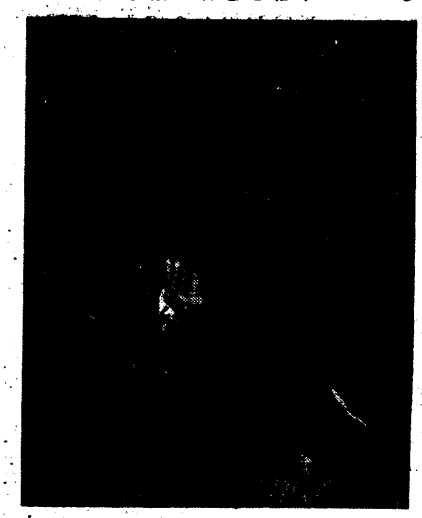
高野伍長は、勇ましく第三中隊（長・江頭陸中尉）に配属になった。ある日、沖縄兵たりをつれ、南島原の陸軍病院（負傷者を迎えにでかけた。

「歩けない者は自決させよ。残ける者は全部連れて帰隊のこと」という内命があり、伍長はそのとおりに実施した。ある神）で聞くと思いますが、なはどうなるか。日本の負けるのいうてくれた。暗く沈黙しきった。

「ピラ」とともに、皇居に敬礼してきた。工兵部隊本部の構造は、天然の要塞（さい）ともいうべき安全なものであった。その前面の平地は地雷をうめた地雷原となっており、M1、M4戦車が（並行列）は神田信吾二人をそれを知らずに進んできて爆破つれ、前線の江頭中隊長のもと

宣伝ビラ

皇居拝し、ピストル自決



恋しい妻よ、子よ

（伝令に行った帰りに、中隊長のひとりが地雷をふみ伍長を重傷をうけた。既知木軍曹知るとく重傷を押し、天皇陛下万歳を三唱、ピストルで自殺した。部隊員から長谷

（新編のゴウ。重傷者の谷をおりたところに、ふさがった入口があり、なかは兵、六百人はいれるひろさで、通路はなかったが、そうも敵軍の、くずれかけた方ノ隊の、あまかんなが敷乱していた。

「七面鳥」ノモンハンの死

「七面鳥」ノモンハンの死

「七面鳥」ノモンハンの死

七師団戦記

あゝ沖縄

<169>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

花火

六月下旬、米軍の大部隊が糸満街道を新垣、摩文仁方面にむかって南下してゆく、これに対し、工兵部隊の負傷兵をのぞく全員が切り込み戦を敢行した。

高野伍長は負傷兵の手当てに専念しながら、壮絶な戦を見ていた。伍長にとって悲しいことは、自分の指揮した負傷兵が、つぎつぎに出陣し、だれも帰ってこないことだった。

福田軍曹軍曹は沖縄兵一人をつれ、敵陣突破をはかったが敵に発見された。軍曹は沖縄兵を中隊へ帰し、自分はそのまま敵陣におどり込んで戦死した。

久野曹一軍医大尉（愛知県）は、切り込み隊の先頭に立ち、敵陣に突入したまま帰らなかった。指揮系統は、すでになくなり各自思い思いに、一身を持てての切り込み戦を展開していた。

六月二十七、八日ごろ、児玉連隊長は当番の山田伍長を切り込み戦に出したあと、戦車攻撃用地雷で自決、幹部全員を自決したという高野伍長は情報を耳にし、部隊の最後を知った。

そのとき生き残っていたのは石部一夫曹長（静岡県）小神外安、島木幸伊軍上等兵ら三人であった。高野伍長は彼等とともに第三中隊のゴウを脱出、部隊本部の陣地へはいった。

もの音ひとつしない。なつかしい児玉部隊長の声も、戦友たちの声も、ここでふたたび聞くことはできない。地面いっぱいの白骨！医務室には看護婦たちの衣物をきたままの白骨死体。

谷藤長は、高野伍長のあてがった前木をつけたまま射になっていた。よく見ると、自骨の死体は、全部銃をにぎっている。

人敵は毒ガスを使用したな。

突然、遠く見降ろす米軍基地からワーッと歓声がひびいてきた。間髪にぎやかな花火が夜空にあがった。海上の軍艦やその他の船のうえからも花火が一斉にあがる。

「なんだろう？」

八月十五日、日本軍の無条件降伏を祝う米軍の終戦祝賀会とは知らず、ふたり社中頭部に到着。出会った友軍から北上は危険であると教えられて南下、首里を過ぎて糸満城付近の野砲陣地で民間人やまじる生き残りの一団二十三人と合流、共同生活をはじめたが、九月三十二日、さきに収容された日本兵の捜索隊に発見された。一同は自決、投降の二派にわかれ激論のすえ、高野伍長が代表となって米軍のジープに同乗。終戦を確認していり、高野伍長は戦闘行動を終了中です。

「七師団戦記」顔字　山岡三四七五部隊下風記・ノモンハン一部隊長の母ハルさん（札幌市）

戦記係から

終戦を祝う米軍

日本軍の降伏で

（代表した人々）

「ノンの死闘」の予約出版を受け付・編記

七師団戦記

あゝ沖縄

<170>

輸送上、最後の頼み

兵隊と生死をわかつ

馬

戦没二万八十五柱の霊にささぐ

山三四七部隊（第一二十四師団制第隊・長・五十嵐三郎大尉）は、四月八日遠王嶺で切り込み戦を行なってから戦闘任務についていたが、四月末、食糧戦線の山三四七部隊が苦戦し相当な戦死、戦傷者がでたからその収容にあたれ！と命令をうけた。

五十嵐隊長以下全員、急遽組織をくる。担架のない者は背負って収容せよ！といわれ、真剣戦闘隊長（宮崎市鶴西町一八五）は戦友たちと戦場にのそんだ。

はじめて見るむごたらしい前、ない兵八人と高橋曹長（山形）をつけて残留員とし、五十嵐隊りにも多い。とても、全員を収容することは不可能だ。手あたりしだい、収容している者から渡す。夜じゅう繰送して明けになった。渡びきれず戦死、戦傷者がでたらその収容に残して後退した。

ひきずる途中や湿地上等兵（長州鳥取県出身）が四手に被弾、野戦へ行く途中で出血多量のため戦死した。

五月二日、部隊は首里と運玉森の中間にある大名部落へ進出の命令をうけた。傷兵のすぐれ

長はじめみんなで持てるだけのものを持って前進した。

部隊編列は、第本部隊、曹長、馬車に薬莢、食糧その他戦闘に必要な物資のすべてをつみ本隊のあとについて進む。

三日前に新垣の馬小屋に繋留

平にいた。その夜、本隊はさらに前進し大名部落に到着。部隊編列は、夜じゅう行軍したが、大名につかないうちに明けになった。

真柳伍長は、陣地らしい穴にはいってやすんだ。ノミがひとくてねむれない。

馬は林のなかにつないでおい

の真摯をうけ、馬が四頭死んだ。残った三頭に民家（新垣、真栄平、国吉）から徴発した馬をあわせて馬車をひかせていた。そのうちの一頭は痩馬で元気はいいが、兵隊を手こずらせる。

とうとう大里の砂糖工場付近にさしかかったとき、あばれだして馬車もろとも三十尺ほど下の川へ落ちてしまった。馬と馬車をひきあげるのに一時間かかった。

そのあいだに本隊は先行してしまっていた。真柳伍長は連絡をとるため馬を走らせた。追いついたとき、本隊は夜風

たが、一頭はタマにあたって死んでいた。かわりの馬をさがしに付近の部落へはいった。どこの部落でも、馬は、はなしがいになっていた。人なつかしさから落ってくるので、すぐつかむことができた。

部隊編列は、つぎの夜、大名くへ行かない。

大名部のそばに民家が五、六軒、いずれも人がいない。馬小屋のなかに傷兵をうけた馬の死体が二つ。

部隊の右となり野戦砲隊四十二連隊（山三四八〇部隊）の一個中隊がいた。野砲中隊は一日に二、三回二斉砲撃をやる。大砲は三、四門あって一門で二、三発撃つ。この砲撃が終わるか終わらないうちに、返礼のように敵の砲弾が飛んでくる。兵隊のかくれている穴はつぶれ、野砲隊からも砲撃隊からも生きうめから戦死者がでた。

夜は照明弾、昼のように明るい。照明弾のからが落ちて来て危険だ。宮城兵長（夕張）は五月十二日ごろ、これで戦死した。

（馬は米軍も使った。ドロドロの泥沼、本は重大なかった）

【七師団戦記】戦記・ノモンハンの死闘」の手紙出版を受け付け中です。

編集　山形三四七五部隊下風一郎曹長の母ハルさん（秋田市・郵便）

七師団戦記

あゝ沖縄

<171>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

重傷者を残す

最期までここに…

死を覚悟し動かず

五月四日の山岳地帯攻撃に、山三四七七部隊は殿軍の任務をもって首里前方に出動、部隊の半数が戦死し負傷した。

五月十五日、大名部落から約二十キロ前後して山三四七八部隊（後藤第二十四連隊）の指揮下にはいり、右翼の陣地につく。敵は首里に通ずる道路の向こう側に居り、これと対峙していた。五十嵐隊長は大隊長、高橋参謀中尉（山形）は中隊長、川崎信夫中尉（北海道）中井少尉は小隊長、四沢博治中尉は指揮班長、真柳伍長は兵器係として指揮班にいた。

日中、敵の砲撃、爆撃、空爆が激しく、穴のなかの陣地にいるよりは、そとの畑にでもいた方が安全なくらい。昼間は穴にひそみ、夜になると切り込み隊を編成して出てゆくが、照明弾と、かくしマイクにやられ、ほとんど帰ってこない。切り込みが戦死した。

連日ものすごい砲爆撃をうけはずした重機関銃の援護射撃をうけて敵陣へ突撃を行なった。

首里はすっかり変形し、どこが友軍陣地なのかわからなくなる。

部隊の右翼の迫撃砲には、山三四七五部隊がいた。非常な苦戦をうけ、前線に負傷した兵隊が、二、三人で助けあったり、あるいは一人で、はいずったりしながら島尻方面へ後退してゆく。その数は一日ごとに多くなり、見送る長柳伍長はそのあわれな姿に胸をしめつけられる思いだった。

そのうちに米軍は、谷間に集結しはじめたとの情報がはいった。部隊は、既装甲車から取り

砲撃をあびた首里の教会

五月二十六日、首里の西三千二百前後の部隊は殿軍を撤し、先発隊を出し、二十七日から後退をはじめた。

部隊も三十日朝の命令で、今夜移動する。負傷者は百中移動の命令は死の命令だった。」

米軍は第一線を赤い布のようなもので表示し、爆撃をさけているので、米軍のそばは近くで向きあっているかぎり、敵機がいくら飛んできても安全だった。

部隊は、日ぐれとともに移動を開始した。どろんこ道に戦死者、また死にきれぬ苦悩した負傷者がたくさんいた。出発した負傷者のうち病人が敵前の陣地へ到着できたか、真柳伍長はくらい気持ちになった。夜部隊の川ぼとりはとくにひどく戦死体でいっぱいだった。

部隊は、また夜があけきらぬこころ、新垣のもとの陣地にたどりついた。

戦没者数以上が戦死したとの情報がつたわってくる。

首里で負傷した兵隊が、二、三人で助けあったり、あるいは一人で、はいずったりしながら島尻方面へ後退してゆく。その数は一日ごとに多くなり、見送る真柳伍長はそのあわれな姿に胸をしめつけられる思いだった。

彼等はそういって残った。あすは、敵の馬のり攻撃をうけて全滅する—それは見送る者にとってうしろ髪をひかれる思いだった。

部隊は、日ぐれとともに移動を開始した。どろんこ道に戦死者、また死にきれぬ苦悩した負傷者がたくさんいた。出発した負傷者のうち病人が敵前の陣地へ到着できたか、真柳伍長はくらい気持ちになった。夜部隊の川ぼとりはとくにひどく戦死体でいっぱいだった。

部隊は、また夜があけきらぬこころ、新垣のもとの陣地にたどりついた。

砲撃をうけて、前線部隊にも機関銃手の高田兵長（北海道）はじめ約二十人の戦死者がでた。

敵はこの勢いをかり、友軍の第二線を突破、攻撃をはじめた。高橋中隊は応戦したが、一時間たらずの戦闘で野村伍長、伊藤軍曹、浅野衛生伍長ら多数戦死者数以上が戦死したとの情報がつたわってくる。

首里で負傷した兵隊が、二、三人で助けあったり、あるいは一人で、はいずったりしながら島尻方面へ後退してゆく。その数は一日ごとに多くなり、見送る真柳伍長はそのあわれな姿に胸をしめつけられる思いだった。

彼等はそういって残った。あすは、敵の馬のり攻撃をうけて全滅する—それは見送る者にとってうしろ髪をひかれる思いだった。

部隊は、日ぐれとともに移動を開始した。どろんこ道に戦死者、また死にきれぬ苦悩した負傷者がたくさんいた。出発した負傷者のうち病人が敵前の陣地へ到着できたか、真柳伍長はくらい気持ちになった。夜部隊の川ぼとりはとくにひどく戦死体でいっぱいだった。

部隊は、また夜があけきらぬこころ、新垣のもとの陣地にたどりついた。

「われわれは、どうせこげないのだから、もう、どうなってもいい。最期までここにいる」

彼等はそういって残った。あすは、敵の馬のり攻撃をうけて全滅する—それは見送る者にとってうしろ髪をひかれる思いだった。

部隊は、日ぐれとともに移動を開始した。どろんこ道に戦死者、また死にきれぬ苦悩した負傷者がたくさんいた。出発した負傷者のうち病人が敵前の陣地へ到着できたか、真柳伍長はくらい気持ちになった。夜部隊の川ぼとりはとくにひどく戦死体でいっぱいだった。

部隊は、また夜があけきらぬこころ、新垣のもとの陣地にたどりついた。

大名部落の部隊医務室の負傷者の半数は、ひるのうちに移動せよとの指示をうけた。

大名部落の部隊医務室の負傷者の半数は、ひるのうちに移動せよとの指示をうけた。

「七師団戦記」
・ノモンハン
の死闘」の予約出版を手付け中です。
原手　山形三四七五部隊に属し一部員の岳ハルさん（札幌市・婦人）

戦記係から

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

<172>

夜襲用の日本刀を スプリング材料に作る

刀カジの名人

夜間切り込みは、各部隊共通の戦闘法だった。山三四八三部隊（菊重兵部二千四連隊・長・中村加之助大佐）でもやっていたが、その夜襲用日本刀は自動車のスプリングを材料に、野外で戦友たちが機銃掃射で倒れるなかで作られた。

作った人は第一部隊山部出身のカジ職人玉手上等兵。兵隊間で刀カジの名人だ正宗の名刀より切れる！と有名だったが、五月中旬、東風平の南の地点でグラマン機の機銃弾をうけて戦死した。同じころ井林上等兵（北見）も機銃掃射で戦死した。このころから輜重隊の戦死者は続出するようになった。

奈大（もくだい）弘伍長（神広市東三条南十一目）は、長谷川上等兵ほか二人と、司令部と部隊間の連絡任務についていたが、八重瀬岳と糸満の中間地点で追撃砲の砲撃をうけた。長谷川上等兵は左腕を負傷して倒れた。

伍長は無事だったが、敵機がやってきたようで、耳なりがしてきた。

〈かわいそうに……埋葬してやろう〉

穴から出てみると、爆弾の落ちたところに、トラックなら二台もはいれるような大穴があいていた。

〈すごい爆弾を落すものだ……〉

山三四八〇部隊（野砲兵第四十二連隊）の西条軍一兵長（札幌市北二十一東一）も、この百五十㎏爆弾を至近距離でうけた。兵長らは、すぐ穴のなかへかくれたが、地上にあった大正四年製造の十五りゅう弾砲（重量約一・二㌧）は爆風をうけて、ひっくりかえった！と話っている。

迫撃砲弾すごい。平塚市付近くらい弾痕に百数十発が一帯に落下し、手足や目をやられた兵隊が、戦友の名をよびながら死んでゆくむごたらしく、あわれな光景を、かつて歩兵伍長は目の前に見ている。

長谷川上等兵を埋葬しながら

〈死ぬならば負傷せずに、ひとおもいに死にたい！〉

そう思った。小銅中尉は、負傷者、戦死者が数知れずなかで鉄帽もかぶらずに第一線を飛びまわっていた。伍長は、鉄帽をかぶってはどうですか！と中尉に進言したことがある。

「死ぬときは、なにをあたまにつけていてもおなじことだ…」

そのことばどおり、壮烈な戦死をとげた。

那覇軍曹は、みぞおちに砲弾の破片をいれたまま、とりだす時間がなくて戦闘を続けていた。

「おい、なんとかして取ってもらえよ」

伍長は、他人のことながら気になって注意した。

軍曹は、生死を超越した態度さびしさを感じた。

日本軍の船舶資材不足とは反対に、米軍は上陸海岸に臨時の港をつくり、物資をどんどん陸揚げした。

【七師団戦記】の予約出版を受け付け

・ノモンハン

編集部から

元気のいい人募集

中隊長。山第三四七五部隊下風（函館）は、私物の軍刀を腰に兼前線をとびまわっていたが戦死し、伍長は火の消えたような・・・（略）

七師団戦記

あゝ沖縄

<173>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

殺してくれ！

弾片をはらにうけ

苦しさに耐えかねる

〈吉田中尉は中隊九隊に源第を積載、第一線の新川（南風原村の西方）に転出すべし〉

命令をうけた中尉は金大伍長らをつれ、午後十一時ごろ八重瀬岳を出発した。トラックは九台ともドアをとりはずしてあった。

午前二時ごろ新川到着。弾薬を友軍にひき渡す。帰りみちの途中で夜があけ、トンボに発見されて砲撃をうける。車に乗っている兵隊は、首をなぎはらわれるような激しい砲撃に生きている気がしない。

吉田中尉は、うしろの車からトラックと兵隊の安否を気づかっていたが、横腹に砲弾の破片をうけた。はらわたがでる。伍長は、いそいで上着をぬぎ、傷ぐちにあてて応急処置をとる。うめいていた中尉は、くるしさにたえかねて叫ぶ。

「殺してくれッ……殺してくれッ」

せめて野戦病院までは――と伍長は中尉を元気づけ、車を弾雨のなかに走らせた。

そのうちに二台、三台とトラックが破裂されてゆく。うなりを立てて野戦病院までは――と

「おかあさん……おかあさん……」

ふたたび担ぎ上げ、車をひきとった。たよりにしていた中尉の戦死に伍長は涙にむせんだ。

「おかあさん……おかあさん……」

つづける中尉は、伍長をにらみつけて叫んだ。

「殺せをくれッ、命令だッ」

いくら命令でも、中尉を助けたい。伍長は応じない。中尉はくりかえし、くりかえし叫ぶ。ついに八重瀬岳の陣地についた。中村部隊長が走りよってきた。中尉の陣地についた。

「吉田ッ！……吉田ッしっかりしろ！」

八重瀬岳の中腹に六時に進撃した。

たなきがらと、水筒、弁当箱をうめ殺ぐ。

家をやかれ、夫を兵隊にとられた避難民のむれが続々と国トしてくる。その老人や病人、子供たちの一時的な避難所に、軍隊が弾雨ゴウとして使っている場所や自然ドウクツをあてた。あちこちで、弾薬とともに敵弾をさけている避難民の悲壮な姿は、戦争のおそろしさを如実に示していた。

遂に負傷者の手りゅう弾自決

第三十二軍司令部は島尻地へ後退した。

米軍は追撃戦にうつった。敵橋は手をのばせば、とどくほどの低空を飛びまわる。やられた日本軍を、まるでからかっているかのようだ。りゅう弾は、空破されるところだった。折りかさなって倒れる住民の悲鳴と絶

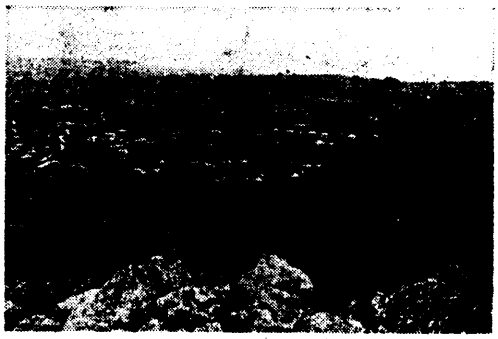
敵にもう抗戦一、二戦が加える。

ほとんどの部落は焼けおちて無残な姿だ。手大伍長は連絡の途中、めずらしくも二十数戸の人家が残っている部落を通り

時、目前に展開される地と肉と土砂のなかに、伍長は立ち迷いになりそうだった。

戦記係から

「七師団戦記」ノモンハン



八重瀬岳中腹から見降ろした高嶺部落

戦没者の霊魂は帰ってきた

宜野湾市　山田三四七五番地下風原字　山田三四七五番地下風原字　一部隊長の母ハルさん（利帆竹）

七師団戦記

あゝ沖縄

<174>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

恐ろしさも忘れて

爆雷かかえて肉薄

一人十殺一戦車

馬乗地区へ後退した日本軍は持て余の切り込み戦で米軍に対抗していた。米軍は陣地のまわりにかくしマイクやピアノ線をはりめぐらして警戒にあたり、これに切り込み隊員がふれると照明弾があがり、集中射撃をあびた。

ある夜、友軍機が飛来して日本軍のいるところに爆が投下された。在大伍長は爆の外側に「開寧軍勇士より がんばれ」と書かれてあるのを読み箱をあけた。小銃十数丁がはいっていた。

すでに自決用の弾薬しか持っていない友軍にとって、これはありがたい贈り物だった。

武器ばかりではない。将兵は戦いにつかれ、軍服はやぶれて全員が負傷していた。銀バエが多ぐちにたまごをうみつけ、ウジがわいている。食糧はかびたカンパンや、ひれた米、なまのサツマイモ。水筒に水をもっている者はいなかった。

在大伍長ら日本軍将兵はかねがね敵撃目標として「一人十殺一戦車」をめざしていた。ひとりとの兵は、敵兵を十人殺すか一台の戦車をやっつけるーという意味である。

兵隊も学生たち（沖縄師範、県立第一中、第二中、第三中、県立農林、県立工業、県立水産、県立開南、私立開南中）も敵戦車に急造爆薬をかかえて飛び込んでいった。

敵の戦車部隊は、この肉薄攻撃をおそれ、戦車のまわり五、六十メートル内に火炎放射をしながら進んでくるようになり、肉薄班はつぎつぎと倒れた。

六月二十日ごろになると、敵の攻撃は馬乗地区に対して、激しくなり、空からは爆弾、海からは艦砲、陸上では高砲、迫撃砲、空は黒煙ゆ

と赤黒い火につつまれ天も地もサク裂するようなすさまじさ。おびただしい死体の散乱で足のしまられたように、たばんありさまをいっている。たましいのない人間のぬけがらだ。

六月二十一日、生残り将兵は各部隊を集に集め、軍司令官からの最後の命令をうけた。

真壁部落のゴウにいた在大伍長は、水上特攻から級攻撃に対する新任務を命令された。

「在大伍長は、兵一人をつれ

沖縄の学徒兵をふくむ日本軍の肉薄攻撃隊員は、爆雷を抱いて戦車にとびこみ、これを破壊した。

へ地区（摩文仁）でありのもをうけてとんでいた米軍行軍隊の後尾を歩兵部隊にひきわたしのため、ただいま出発すべし。現地にいる西田曹長と交代し、曹長はこの本部へただちにもどるように伝えること」

ふたんおとなしい水上技術准尉とは思えないきびしい命令。伍長はふくしよう（うけた命令をそのままいうこと）しながら胸いっぱいになった。

〈鹿児島時代以来、准尉殿、准尉殿と自分をはじめ、部下のみんながしたっているこの人ともう、これでお別れだ…〉

「准尉殿…」

伍長は、どうしても思いきれなかった。

「どうせ死ぬなら、自分も部隊長殿や准尉殿と一緒にたたかって死なせてください。お願いです」

〈みんなと別れ、ひとりで死ぬのはさびしい…〉

みるみるうちに准尉の四隅に涙がわいた。

「在大、おまえの気持はわかる。だが、部隊命令なのだ。ゆるせ。…早く行ってくれ。たのむ…」

（聞手　山崎三四七五部隊下士官　一部曹長の妻ハルさん（札幌市・郵四）

戦記から

「七師団戦記・ノモンハンの死闘」の手紙出版を引き付け中です。

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

<175>

麻文仁へ

照明弾で昼のよう

思うように進めず

命令には従わねばならぬ。本大伍長は、身をさかれる思いーれを県立第二高女生、看護婦安へしかたがない！〉

鳥袋二等兵（沖縄）をうながし、真壁のゴウを飛び出した。右にも左にも敵兵の姿。たえまない爆発音で敵機はやかけそう。死んだ気になって走った。距離は約二千五百尺。敵に撃たれながら八地区についた。

〈よく到着できたあのだ…〉

生命のふしぎさー

考えた。

ゴウ内に小銃弾数千発が供給されてある。これを歩兵部隊に最後の補給をする。伍長は前田曹長に命令内容をつたえた。任務を交代した曹長はゴウから駆け出した。（本部へ着かないうちに曹長は敵弾に倒れたということを伍長は、あとで知った）

伍長は弾薬点検のため、ゴウの奥へ進んだ。弾薬箱のうえに負傷兵がぴっしり横ており、これを県立第二高女生、看護婦安堂既もいた。

〈彼らは、ゴウから外へ出ないので総攻撃の命令もしらない

「既に行こうぞ」

伍長は鳥袋二等兵をさそった。

照明弾は、つぎつぎと、六発ずつ打ちあげられ、昼間とまちがえるほど、一歩も進めない。じっと、照明弾のときえるのをまち、おりから見て走り、伏せる行動をくりかえしてやっと道路の中間（出発点から約二キロ）まできたとき、午前三時すぎだった。

西の空からまっ赤い閃光がてった。六月二十四日夜、米軍のゴウを出発、米軍の砲撃から山腹の掘りわり道路にさしかかったとき、照明弾が上がった。

「伏せろ！ふたりとも！」

伏せると二等兵と敵弾のかなかを真壁のドわりこむ。

「ここは危ないから死ぬ。どこか安全なところへ」

鳥袋二等兵に元気づけられ、付近をさがした。子供でも掘ったのか、道路わきに入り口五十糎、奥行き三尺くらいのタコツボをみつけた。ふたりは、そこへはいって敵弾をさけた。

午前六時ごろ、ひとりの一等兵が走ってきた。タコツボのふたりを発見すると、真っぱずませながら

「たのむ、俺もいっしょにいれてくれ」

ふたりでやっとのところへもうひとりーしかし、ことわることもできない・土のなかへ生き埋めにされたような苦しさ。

三人は杵をかき、のどがかわくのをまんして、じっとからだをよせあっていた。

そのうちに、どうにもならないことがおきあがったのである。

（真壁万寿之丞にもうでる門かって右から金城茂、宮平満、兼氏の弟、宮原ミツ、島袋力メの諸氏＝沖縄北海道会役員）

真壁＝山第三四七五番地下真一郎氏の長ハルヲさん（名護市・婦人）

七師団戦記

あゝ沖縄

<176>

戦没二万八十五柱の霊にささぐ

折れた軍刀

手りゅう弾の身代わり

目前の射撃に傷もなし

午前十時ごろ敵襲。等兵が、苦しそうに顔をゆがめ、がまんができない」といった面と様子で。

「あの、用便がしたい」

という。この砲弾のなか、そとにでてやるわけにはいかない。

〈いっしょに死のうともかいあった戦友じゃないか。少々は、くさいだろうが、このなかでやらせてやれ〉

準大伍長は、自分にいいきかせた。

〈これが、みな殺しだ…〉

緊張感が全身を走る。見やるむ三人のすぐ二メートル前に、まっかに目やけした上半身はだかの大男が立って、穴をのぞいた。

〈変なくつをはいているなあ…〉その時、伍長の胸中をかすめた感想。ほかに、なにも考えず。むだな三人いっしょに死のう。これが最後…〉

〈いや、そんなことをしてもどうせ、また投げてよこすに決まっている。〉

「開戦前、軍刀が…」敵襲二等兵にいわれてみると、支給された九五式軍刀が中央部から折れている。

〈うん、この軍刀が身がわりになってくれたのか…〉

折れた軍刀に頭をさげたい気持ちになった。

〈この軍刀は、おれの身がわりだ。この穴を出るとき、ここ

〈うめてゆこう…〉

伍長は心にきめ、三人で穴になるのを待った。あつい。のどがかわく。まゆつくつだ。

〈水がのみたい。あの米兵のゴウのなかには水があった。これから敵文化人へはとてもけけそうにもない。米兵へもどって水を腹いっぱいのみきえした自、もう、あとはどうなってもいい

〈敵襲！〉

〈敵しい砲音。等兵の耳もと、胸のうえをかすめて飛ぶ。敵は三人。めくらめっぽう撃っ。撃ちながらまりゆ弾を目の前なげてきた。

にぶりこぶし大の敵のまりゆう弾は、七、八秒で爆発する。それを知っていた。

〈ひろって投げかえしてやろうか〉

だが、伍長は瞬間的に思いとどまった。

白もりつ、それがフワフワと前に飛んでいる。ゆっくり前進ついた。米兵は三人。ならい。五つ。ゆっくりしかに近く見え、

着地した。

伍長は、からだをゆうゆたしかめた。どこにもけがをしていない。敵襲二等兵は、とび込んできた二等兵も！

〈三人とも無事だ…〉

「ふ、ふ、ふなあ、どこもやられないぞ！」

伍長はふたりの顔をみた。

「開戦前、軍刀が…」敵襲二等兵にいわれてみると、支給された九五式軍刀が中央部から折れている。

〈うん、この軍刀が身がわり

準大伍長は、カラカラにかわくのどを右手でなぜた。ふと自分の動作が胸騒をかすめる。

（本年六月十二日、沖縄で、の戦闘の手前山服を洗げ付けの敵襲者に、北海道に戻をかけてくれた方 平北海道 会会長）

戦記係から

『七師団戦記』・ノモンハン

七師団戦記

あゝ沖縄

<177>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

水

ゴウの下にわき水

危険をおかし近づく

夜になった。本大伍長ら三人は、タコツボを出た。照明弾が明るい。

〈水が飲みたい。照明弾が照らしていても、もう、どうでもいい〉

〈水はないか！水がまい歩く。ひあがった川のようなところへ飛び出る。照明弾のあかりで見張すると、一面に日本帝国軍兵の死体。

〈日本人だろう！大変な人数だ。みんな集団自決でやられてしまったなあ〉照明弾が消えた。月がない。まっくらやみ。

「おい、死体のうえをはっていこう」

照明弾のきれまは五、六分間。そのあいだに行動しなければならぬ。三人は戦死体のうえをはって進む。

〈のどがやけつくようだ。水はないか…〉

いくらさがしてもない。焼けた砂を口に入れる。刺激すれば、あるいはツバがでてくるかもしれない！と思って、サトウキビのシンをかじる。あまいしるがかわきをうるおす。

米軍のゴウの間にでた。ゴウの上で米兵が、たえまなく照明弾とえい光弾を次々にうちあげている。水を飲みたい一念でゴウへ飛び込む。

ゴウの下にわき水がある。伍長と二等兵は走っていって水面へ顔を突っ込んだ。飲めるだけ飲んだ。何度も飲んだ。胃ぶくろから腹にかけて、針でもつめこまれたように痛くなる。水くさいケップ。それでも、かわきはやまない。また水へ口をつけた。

やっと人心地がついてふると、あの二等兵のゆくえなく、ふたりだけだ。

「あいつは？」

「途中まではいましたが…」

いなくなったものはしかたがない。伍長は、もう一回、水を飲もうと水面に口をつけてすいこんだ。

〈にがい！〉

ひとくちにがさだ。

「おい、どうしたんだろう？この水はにがいなあ…」

軍袋二等兵も口にふくんでみて、変な顔をし、はきだした。

「班長殿、水をたべてこまれたんでしょうか？」

〈あれほどうまかったが、こんなにがい水になっている！顔にうかんだ死顔についてあえた。

〈風にふかれてどこからか飛んできて顔にベタリはりついた新聞紙みたいな笑い

伍長は、おのれの行ったことを思いたった。

「陸のゴウ、たにたにがいものをいれてめたらしたんだろう。それとも敵兵、米のめしを喰いつぶいから死んでやろう。めしをたべたいぞ」

飯ゴウにとげくさい玄米をいれにがい水でたきはじめた。なつかしいめしのにおいが鼻にしみる。

〈これを食ったら死のう〉

めしがたきあがる。ふたりは顔を見合わせ、さびしくほほえんだ。

〈いままで、おれは笑いを忘れていた笑わなくなってから何日、いや何カ月だったろう？〉

伍長は、おのれの顔にうかんだ笑顔について考えた。

〈風にふかれてどこからか飛んできて顔にベタリはりついた新聞紙みたいな笑い

そう思いながら、飯ゴウのめしを口にいれた。

〈めしだ。なつかしいめしだ

伍長がふたくち、みくちめしを飲みこんだとき、ゴウの外で異様な物音がした。

（連載　山田三四七氏戦争下風一部遺族の母ハルさん（札幌市・談）

米軍の草原、暗殺、何年間かは戦死体のにおいがただよい、いまでも沖縄住民はここへ近づくのをきらっている

七師団戦記

あゝ沖縄

<178>

戦没二万八十五柱の霊にささぐ

くぼ地底にうめき声

かすかな息する中学生

脱出計画

「なんだ？」

「だれか走ってきます！」

幸大伍長と馬袋二等兵は銃を見合わせて緊張した。手にはしっかりと銃をにぎったままだ。兵長の指揮をつけた兵隊がフラフラしながらやってきた。疲労しきっている。

「み、水はありませんか？」

伍長は緊張をとき、

「ああ、水か。水ならそこにたくさんあるぞ」

兵長は不安そうな目で

「そこは、だいじょうぶでしょうか？」

伍長は、いささか腰がたった。

〈今年の風い出に、最後のめしを味わっているところへ、よけいなやつがやってきたもんだ！〉

不満げな声でもあった。

「だいじょうぶもなにも、あるもんか。俺たちはこれから国決するんだ」

という。

〈ほんとうに、そんな命令が出されたんだろうか？〉

兵長は、うたがった。そして

「もう、ちょっと待ってください。このゴウの奥に、まだ将校や三人ほどいます！」

〈仲間がいるって？…仲間がいるなら、俺たちはいそいで死ぬ必要もないわけだ〉

その兵長の説明によると、牛島軍司令官は自決したが、自決する前にへもし生き残る将兵がいたら、離島を放棄して国頭地区へ行き日本本土から友軍が沖縄を奪回してくるから、その時、国頭を離地として米軍の後方をかくらんせヨ〉との命令があったので、いま、奥のほうでその作戦を計画していた。四人は米軍のゴウへもどった。国頭へ行くのは往上突破か陸上突破かについて四人は毎日、討議をかさねた。

目のまえに迫る問題は毎日の食糧である。伍長とふたりの上等兵は、夜になるとゴウをでて一日ごとに白骨化してゆく死体のなかに食糧をさがしあるいた。敵を撃つ戦（敗残の日本兵を襲撃する戦闘）をやっていた。

四人は、いつ襲たれるかわからない不安な状況のなかで、あたりに気をくばりながら食糧になるものをさがした。黒こげになった玄米やサツマイモを拾い、感激してゴウに持ちかえった。

ある日、幸大伍長は、通りかかったくぼ地の底からきこえるかすかなうめき声を耳にした。人が倒れている、警戒しながら近づくと、沖縄の中学生だった。学徒出陣らしい。

かすかに息をしているが、グランとして死人同様。幸大伍長は、

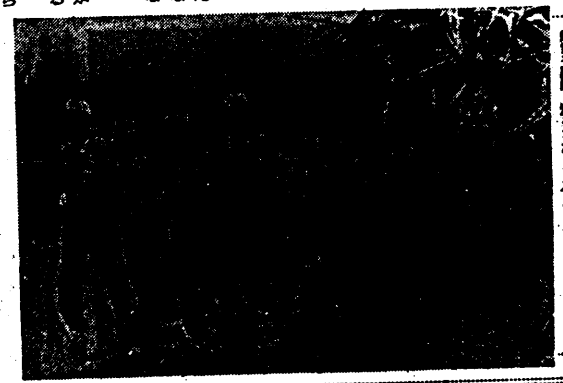
「かわいそうに、つれていってやろう」

ひとりでも戦友のほしいときだ。四人で中学生をだきかかえ米軍のゴウへはこんだ。

口もきけない学生に水をあたえた。かぶりつくように飲む。

いっぺんにのませると死ぬ。時間をおいてのませた。数時間後に元気をとりもどし、倒れたわけを語った。

ことし九月四日、アメリカのしげる氏を、国際リレーの講習をする沖縄北部高校（中学校の後身）の教師は高校生徒に、涙をながしながら感激者に乗びゆんだ



撮影　山田三四七氏提供下風

一部夏の日ハルさん（糸満市・婦人）

七師団戦記

あゝ沖縄

<179>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

その中学生は十六歳。米軍上陸前に戦車肉薄攻撃隊員として特別訓練をうけていた。戦闘がはじまると、訓練どおりに爆雷や持たされた。命令により敵戦車が進撃してくると予想されるくぼ地で待機していた。何日も待った。しかし、敵戦車は、この中学生のそばを通らなかった。日がたっていった。一週間くらいのうちに学友たちはみんな戦死し、中学生は空腹と疲労でうごけなくなってしまったーという。

本大伍長らの指揮で中学生は生気をとりもどし、兵隊と行動をともにすることになった。

五人で国頭地区へ向かい敵中を突破することを決めた。それには、各自が体力をつけることはっきりした地図をつくることなどが必要になってきた。

日もわからなくなっていたが、ある日（本大伍長は六月末ころと推定）五人のいる米軍のゴウの東側のゴウでものすごい爆音や知っていた。だがのみたいとなると むしょうにのみたくなる。

伍長はだれも持っていないの

タバコ

ただ、吸いたい一心

マネ事で気まぎらす

〈なんとかならないものか〉

ろくない表情でぼやいたのでみんなが笑った。

× × × ×

米軍の掃とう戦が続いていた。

日中、米兵はゴウの入り口に現われ、なかをのぞく。日本兵のいることがわかると、爆雷を爆発させて入り口をふさぐ。

伍長は、入り口に現われた米兵に手りゅう弾を投げた。サクレツ。同時にキャーキャーさわぐ声がし、逃げていった。

〈ざまみやがれ…〉

と思った。ところが、数時間後、入り口にあらわれた米兵は、黄リン弾を投げ込み、メチヤクチヤに撃ってきた。

ゴウのなかは黄リン弾の煙で苦しく、リンで軍服が焼ける。手ではらえば、はらうだけひろがる。外では米兵が伍長らの出てくるのをまちかまえている。五人は奥のほうに逃げこんだ。

大鶴上等兵が十円札をとりだした。それを紙まきタバコのようにまるめ火をつけてうまそうにふかしてみせた。

「やってみろ、タバコの味がするぞ」

いまは必要のない十円札。伍長はじめみんなが十円札で紙まきタバコをつくってふかした。

「タバコの味はしないね。すこし紙くさいが、十円の味はするねえ」軍功上等兵がおもしろくない表情でぼやいたのでみんなが笑った。

米軍は、サーチライトをつけて入り口からはいってきた。彼等はめくらめっぽうに自動小銃を撃ちまくる。奥にいた日本兵たちも、無抵抗抵抗してくれ」といいのこし、やみにまぎれてゴウを出ていった。

米軍は、サーチライトをつけて国頭へ行くところだ。きみたちも、無抵抗抵抗してくれ」といいのこし、やみにまぎれてゴウを出ていった。

日本軍に掃とう戦をやっている米軍

が三人、呼人と倒れる。伍長らの撃ち込んだゴウのなかなどに沖縄の住民をひとりつれた少女（氏名不明）がいた。彼は「掃討」あかるい沖縄住民と

顔写　山田三郎七五師団陸下風一郎曹長の提ハルさん（札幌市・写真）